The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	都市を見る視線 : 間主観性と都市政策
Author(s)	一野, 千夏
Citation	国際公共政策研究. 2005, 9(2), p. 225-240
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/4663
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

都市を見る視線[1)]
—間主観性と都市政策—

Looking at Cities from Different Perspectives[1)]
—Intersubjectivity and Urban Policy—

一野千夏*

Chika ICHINO*

Abstract

This paper is an introduction to the study of normative urban policy. Pseudo-scientific methods are called into question from the viewpoint of phenomenology and symbolic interactionism. Causality and dualism cannot explain everything under the sun. The life-world which is based on multiple realities requires not only an objective approach but subjective and intersubjective approach. The focus of attention should, therefore, be placed on the process of communication by means of words/symbols. It is a contribution to interdisciplinary and comprehensive urban policy by offering different perspectives which has been left out of consideration before.

キーワード：間主観性、生活世界、多層的現実、社会的相互作用、知識の統合

Keywords：intersubjectivity, life-world, multiple realities, social interaction, integration of knowledge

1）表題を「都市への視線」でもなく「都市を見る視点」でもなく「都市を見る視線」としているのは、視点という言葉を視線とすることで点のもつ静的なニュアンスをより奥行きや動きの感じられるものとするためであり、また、「見る」という動詞を使用することで人間の意図や意志をより強調し、一点ではない多様な見方の存在を表現するためである。それらの視線が並存しているのである。

* 大阪大学大学院国際公共政策研究科博士後期課程

はじめに

都市の状況を読み解き改善を図ろうとする都市論や都市計画論は多数あるが、その多くは工学や社会学などの視点から都市を見たもので、たとえ総合的、学際的な視点ということを謳っているものでも、結果的にはそれぞれの専門性に傾きがちである。

たとえば、都市社会学が対象としてきたのは都市化現象や都市問題であり、それらに関する事実や意識の調査や分析であったが、それらは都市の政策を包括するものではない[2)]。都市計画の分野では、空間中心の計画の中で、住民参加の手法なども検討されてきたとはいえ、ハード、ソフト両面ともに技術的な側面が中心のようである。また、計画という言葉は未来を含意することからも都市政策の一部を構成すると言える。地理学においては、計量中心の流れに対し、1970年代に現象学をよりどころとする人間主義地理学が現れた[3)]。しかし、それが土地や空間の問題を主として扱うことに変わりはなく、それも都市政策の一部である。行政学は現行制度を踏まえて、一定の理想に照らし現状の改善を研究するものであるが、生活という視点が、行政という組織や制度に向けられるほど強くない。

要するに、これらはいずれも都市政策の部分的な記述であり、専門性の範囲内ではその意義が認められたとしても、生活はより幅の広い多元的な現実であるために、都市生活の現実から見ると物足りなさや違和感を覚える。都市政策は、社会学、都市計画学、地理学、経済学、政治学などの既存の各学問分野の領域内だけでは論じきれない。

また、日本では学問と実務者の役割がそれぞれ分離独立しており、研究と実務の相互補完の場や機会はあまりない。さらに、社会制度や組織に縛られて、研究の思潮が反映されにくいこともあって、現実が変化するには時間がかかる。たとえば、市民参加についてみれば、1960年代末においても課題であったが、真剣に目を向けられるようになってきたのは、1990年代に入って財政状況の悪化に伴う変化、変革を迫られた状況のもとでであり、それが意図する内容もやはり社会的状況に左右されて変わっている。

こうして、空間的な面だけでなく社会的、文化的制度や仕組みも含め、個別の政策の企画や実施、ノウハウの整理、そこに含まれる市民をはじめとするさまざまな主体と自治体との

2）都市の定義は、農村との対比をはじめとしてさまざまなものが考えられるが、Max Weberのように、すべての都市に共通していることは「ともかく一つの（少なくとも相対的に）まとまった定住」と見るのが妥当と考える。また、都市を現実の行政単位としてあげるならば、日本における市町村レベル、都道府県レベルなどが考えられるが、それらは固定的なものではないので、ここではあえて限定しない。政策は政府としての意思を示す方針や計画、制度などを包括した概念。広い意味では個別の事業なども含むが、政策の方向性が具体的に示されて事業化されると考えられる。政策については、目標としての将来像をもつことは不可欠であるが、現実には現在の課題への対処が大きな割合を占める。また、都市政策の主体は市民を中心とする人や組織であるが、その意思を実践する機関として自治体が中心的な役割を担う。

3）現象学はフッサールを創始者とする哲学の一派で、その定義に振幅はあるが、方法論としては生きられた世界の経験を起点にして、それを精緻に記述することによって明らかにしていこうとするものである。

関係性にとどまらず、自治体の組織としての管理的側面も包含し、理論と実践、実務を統合しようとする意味での「総合的な」都市政策の規範となる理論はこれまでほとんど提示されてこなかった。そこで、自治体の政策全般を見渡し方向性を示すだけでなく、理念を実現するための前提となりうる幅広い視野からのアプローチが求められる。したがって、本稿の目的は、都市政策における学際性、総合性、実践性、生活という視点を補完する統合的理論とその枠組みの基盤を提示することである。

その際に中心となるのが間主観性という概念である[4)]。間主観性は哲学、社会学だけでなく、さまざまな学問の枠を超える概念であり、教育、医療、福祉、環境などの個別の政策分野において、間主観性という概念がキーワードとして示されることもあるが、さまざまな分野を包摂する都市政策を現象学に由来する間主観性の観点からとりあげたものはほとんどない。もっとも、それは公共性を考えるにあたっては基盤となる概念であり、一般的には間とか共生、公共性、人との関係、場合によっては良識というようなさまざまな言葉でその意味するところが表現されている。公共性の意味合いを「私」に対立する概念として、あるいは共通の利害というような価値観に左右されやすい定義から考えても益はない。多くの主観が共有し、それにより客観的な世界が成立するという間主観性の定義づけから考える方がより明快である[5)]。そのため、このように普遍性、客観性をそなえた間主観性という言葉を基軸として都市の姿を見ることは都市政策を統合するパースペクティブを提示する目的に即しているものと考える。

1．科学と客観性の限界

1.1　科学的方法と客観性

本論のパースペクティブを説明するにあたって、いわゆる科学的方法とはどういうものかを問いかけることからはじめたい。なぜならば、一般に科学的方法と考えられている方法と本論におけるそれには若干の隔たりがあるように思うからである。

概して、研究というものは科学的であり、科学的であるためには客観的であるとか普遍的でなければならないと考えられているのではないだろうか。しかし、そもそも「科学的」であるとか「客観的」「普遍的」であるとは、どういうことなのだろうか。「科学的」とは、実証的、合理的、原理的に体系づけられた思考法、「客観的」とは、誰がやっても同じ答えが出る、あるいは再現できるということ、「普遍的」とはあらゆる事象にあてはまることと定

4）間主観性の内容や解釈は定まっていないが、さまざまな個人に共通するもので、主観、客観と異なり他者との関係性の中で生じる概念である。
5）間主観性は、そこから価値が生じるという意味で価値と関係するが、概念そのものは一種の様式やパターンと考えている。

義される。しかし、それ自体の意味にはさしたる疑問は向けられないでそれらの言葉が理解され、客観性や論理性が科学的であることの前提とされているのではないだろうか。

物理学や数学は、論理的な自然科学の基礎となる研究と認識されている。自然の世界は自然科学的探究によってより精緻にその様子が捉えられるようになってきた。社会科学も仮説と実証を軸とするその方法を採用し、より精度を高め、より科学的であることを目指した。その手法はあらゆる現実を対象とし、数理的処理が適用され、人間や社会のあり様の合理的な解明の試みがなされてきた[6)]。

しかし、自然科学の世界で使用される方法を社会科学が対象とする世界や生活世界に適用することは可能なのだろうか[7)]。

現実の理念化・抽象化に普遍性が見い出されたのは、数字という抽象化された体系の中では、それを基準あるいは単位としてあらゆる事象が認識されることで、その象徴的記号としての数値によって表わされる距離や面積、体積などが同じであれば、独自の属性とは無関係に、異なる土地や空間を同じものと捉えようとし、測定値はどこにでもあてはめることが可能になるからである。

数字のもつこの特性のおかげで、数学という限定されたシステム内にとどまらず、その外側に引っ張り出され、人間が日々の生活を営む現実世界の把握についても有効な手段として広く用いられることになった。それは生活における場所や時間、主体の固有性や多様性が剥ぎ取られてひとつの体系のもとで解読されるということを意味する。そこでは記号が客体として生活世界を表現する手段となる。

このような抽象化は質の異なるものの比較を容易にしたのと同時に、現実世界における人間的、社会的な意味を目隠しする。換言すれば、この手法が科学の論理とみなされることにより、それ以外の論理は排除されるという弊害をもたらした[8)]。数学は表現方法のひとつである。それは有力な表現手段でありながらも、数ある方法の中のひとつにすぎないものであ

6）現象学を提唱したフッサールは、数学が教師として道を開いてくれたこととして二つの側面をあげている。ひとつは物体世界をその空間時間的な形態に関して理念化することを通じて、理念的な客観性を創造したこと、もうひとつは、測定術と結合して現われ、その固有の理念的な対象に近似的に関係する認識が得られるということを示したことである。同時に、このような世界の抽象的に限られた側面においてのみおこなわれるような客観化の仕方は、似たようなことが、具体的な世界一般に対しても可能ではないか、という問いを喚起しないかとも述べている。(Edmund Husserl 訳書63-64頁)

7）フッサールによれば、生活世界は、人びとが生きている具体的な日常経験の領域であり、常に人が実践的な関心を払っている、あらゆる経験の基底となる生きられている世界のことである。常にあらかじめ与えられてある世界であるが、そこで生きている限りは「あらかじめ与えられている」という言葉を必要としないし、世界はわれわれにとって常に現実であるなどと特に断わる必要もない自明性を備えている。学に先立つ世界であり、近代科学が作りあげた、理念的で客観的な世界とは対照的な世界でもある。理論的－論理的構築物は原理的には知覚することができないのに対して、生活世界に主観的なものは現実に経験しうる。

8）地理学者イーフー・トゥアンはこの弊害を次のように表現している。「経験的データの相当多くは、自然科学が無条件で導き出す諸概念に合致しないということのために省みられず、忘却のかなたへやられてしまう。その結果として、人間の現実に関するわれわれの理解は損なわれてしまうのである。おもしろいことに、経験の深さに対するこのような盲目は社会科学者に影響をあたえているだけでなく、普通の人びとにも影響をあたえている」(Yi-Fu Tuan, 1977 訳書356-357頁)

る。ところが、それこそが絶対的な真の存在だと思い込み錯覚すれば、生活世界の現実が蔽い隠されてしまうのである。

1.2 数字が捨象する現実

もう少し具体的に考えてみよう。統計やアンケートは、社会における様々な現象を把握するために一般的によく利用される手法である。量で質を表現する方法であり、自らの体験を超え認識を拡大することができる。そこで、人口や事業所数、失業者や物価、ありとあらゆる種類の統計が定期的に、あるいは単発でとられている。対象範囲も市町村レベル、一国、世界レベルほか小さなものから大きなものまで多彩にある。こうした情報は印刷物として出版されたり、インターネット上で公開されたり、組織内部で利用されるなど、何らかの検討材料にされる。都市行政の場においても課題の把握や説明、新たな施策や事業導入の検討、予算策定時などにおいて、不可欠の要素として利用されている。

そうした情報をもとに仮説がたてられ、それらは客観性を証明するという意図をもって念入りに取り扱われる。統計は数値を用いて何らかの集団における要素分布を調査し、そこに統一的な傾向があるかどうかを分析するものである。それはたしかにひとつのパースペクティブを示してくれる。

ただ、はじめからそれが判断基準とされるのであれば、現実との乖離は存在しないことになり、そこには捨象が生じる。そのことが現実と政策との乖離を積み重ね、正当性から遠ざかるという事態をも生じさせる。

統計によって示された事象や人は現実そのものを表象しているのではなく、無数の要素の中から抽出され、ならされた近似値である。都市に関連して使用される統計や科学的手法について、それが一面を表わすものでしかないという見解をいくつか示すと以下のようなものがある。

ジェーン・ジェイコブズは統計が示す人間について架空の人物に過ぎないと語っている。「少なくともそこに選ばれた一人は、完全に他の誰とでもとり代えうるものとしてとり扱うことができる」からである[9)]。

代替可能性は固有の価値、具体性やローカル性からの乖離を含意する。人間や都市という

9）Jane Jacobs, 1961,訳書156頁。
また、社会学者、若林幹夫（1999、19-20頁）は東京都の統計を例にとり、104万戸の世帯から吐き出される1,622トンのゴミや9か月の間に生まれた8,153人の赤ん坊といった統計や数字が示すものは、集計された「数量」としての赤ん坊等の都市の諸属性であって、数値による表現は「膨大な量のゴミ」とか「大量の人口」のような表現よりは具体的であるとはいえ、数値を通して人々の姿が具体的に見えてくるわけではないという意味で、決して「具体的」でなどなく、徹底的に「抽象的」であると指摘し、統計による都市の把握の仕方も現代における都市の思い描き方のひとつであると述べている。続けて、統計において都市が了解されるあり方と、象徴的な構造によってイメージされて了解されるあり方とでは、了解のあり方も、そこで現れてくる都市の像も異なるものであり、それゆえ私たちはそれらを別のものとして区別しておいた方がよいという。

具体的、ローカルな存在は、数字に置き換えられることで、具体性とローカル性を捨象しているからである。

地理学者エドワード・レルフは都市計画によく見られるテクニーク優先のやり方を、個人や地域社会の生活と価値観よりも、抽象的、経済的、そして公共的な利益に重点を置く偽物性と指摘する。さらに、一般的に科学の問題や手法は、生きられた世界の事柄を扱うにはあまり価値を持たないことは明らかであり、場所の問題においても、疑似科学的な都市計画や社会工学は、できる限り最大の思いやりをもって用いられる必要があると述べている[10]。

よりよい都市を目指しながら、個々人の生活の向上に必ずしも結びつけることができないという都市計画に伴う矛盾は、科学的方法を研ぎ澄ませ推し進めることによっては解決できないものである。

伝統的社会科学、その人間研究のための科学の使用、「重要な因果変数」の定義に批判的な立場をとるシンボリック相互作用論においては、人間行為の中心的な質を考慮する経験的技法の発展が課題にあげられている[11]。そうして、主体的な人間の自我による状況定義と方向付けとは無関係に、過去の出来事だけが現在の行為を引き起こしているのではないことを、科学者は認めなければならないと考えられている[12]。

アルフレッド・シュッツは科学的思考の世界を、夢と想像と幻想の世界、芸術、宗教的経験の世界などと並べて、「限定された意味領域」と規定しているが、科学は現実の世界において有効性を示さなければならず、「科学」と経験のギャップを埋めるには、人間の主観性とコンテクストという要素を抜きにすることはできないのである[13]。

以上のような見解の中で、いわゆる科学的な方法論のもつ抽象性、代替性、偽物性、決定論的性質、科学的思考が限定された意味領域であることが指摘されているが、もちろんだからといって数字や統計やアンケートのすべてが否定されるものではない。

慎重に抽出された要素から導き出された種々の数字はさまざまな洞察を与える。しかし、それを鵜呑みにしてしまえばそれらを有効に使っているとは言えない。有効性ゆえに信頼が

---

10) Edward Relph, 1976 訳書207頁

11) シンボリック相互作用論はG.H.Meadをその源流とする人間の行為研究のアプローチのひとつ。Meadは自我形成をIとMe（他者との相互作用の中で模倣を通して他者の役割取得し、自らの視点を獲得する）の2つの側面を伴うダイナミックな過程と捉えた。フィールド・ワークや参与観察法などを通じて、言語等のシンボルを通じた社会的相互作用のプロセスの解釈を試みている。

12) Joel M. Charon（2001, pp.207-208）人間行為の理解のための具体的な方法論に関しては、社会科学の典型的な調査は実験室もしくはアンケートを通じて行われるが、人々についての研究は実際の環境における人々を表現しなければならず、この研究は印象に基づいたりジャーナリスティックであるべきではなく、できるだけ慎重、批判的、体系的、客観的でなければならないとする。それゆえ、コントロールを受けた実験やビデオが補助的に使用されることはあっても、現実世界が常に人間の行為を理解する中心的な研究室であるとする。

13) Schutz（1970訳書271頁）の言う「限定された意味領域」は(a)すべて固有の認知様式をもち(b)それぞれの世界でのすべての経験は、認知様式に応じて一貫した矛盾のないものであり、（ただし、日常生活の意味とは対立する）(c)それぞれは、それに固有な現実としての強度（現実性の強度とは違う）を与えられる。それらの経験の一貫性は経験が属する意味領域の範囲内でのみ成り立ち、他の意味領域では適合しない、あるいはまとまりと一貫性を欠くものに見えるという理由から「限定された意味領域」であるという。

寄せられる科学的思考の功罪を踏まえたうえで、選び取られた科学的手法による世界の解釈の仕方、使い方に配慮し、その正しさが検証されなくてはならない。たとえば、準拠図式、類型、統計などは、現象そのものはすでにあることが明白という前提をたてているが、その自明性を問い直すところを起点とすべきなのである。

近代科学は「複雑な対象を単純なものの複合としてとらえて単純なものへと分割し、単純なものこそ最も明確なものであるとする考え方」を前提としてきた[14]。何らかの現象を数字で説明するのは最も手っ取り早く簡単な方法である。その内容の理解度とは関係なく、複雑そうな現象でも、数字を示されれば明晰、明快、なんとなくわかったような気になるものだ。そのうえ客観的に正しいと認知されるとすれば、たとえ理解していなくとも安心感を覚える。しかし、最も簡単ということは、その方法が完璧であるということを保証するものではない。導き出された数値が現実の一面を表わしているという意味で一面的に正しくとも、その正しさはあくまでも部分的な正しさなのだ。それを取り上げる過程で何かの要素が捨象されている。そこで取り除かれた要素がきわめて重要な要素であったか、さしたる重要性をもたないものであったかはわからない。しかし、中身を問うことなく、捨象という行為を至極当然のこととして世界を解説することでよしとするならば、それは疑似科学的方法になってしまう。これはいわゆる「科学的方法」が無意味であるというのではなく、パースペクティブとしての限界を理解している必要があるということなのである。

1.3 生活世界と科学

前項で述べたような疑似科学、疑似客観性を私たちが生きている具体的で実践的な日常生活世界にあてはめても、それを理解することはできず、疑似的な現実、あるいは現実世界の代用品が見えるだけである。

生活世界において「当たり前」とみなされてきた現実に対する「当たり前」という判断をいったん置いて、その本質を見つめようとするのは疑似的な現実認識を回避するひとつの方法である[15]。そのことでこれまでは考えるまでもなく明らかなこととみなしていたことと矛盾する事実や、以前は予想することもなかった事柄も見えるかもしれない。すると、それまでは当然としていた判断にも躊躇を覚え、本当に「当たり前」なのか出発点に戻って考えようという気になるだろう。科学の正当性が保証されるには、こうした暗黙の前提に対する懐疑のプロセスが介在する。

---

14) Gaston Bachelard, 1934 訳書331頁。

15) 人は日常生活において、日本という国や大阪市という都市の存在に疑念を抱くことはほとんどない。食堂で何かの料理を頼めば後でその対価を支払わなければならないというシステムについても当然のこととみなしている。さまざまな社会的な制度や人や社会の存在は大抵の場合、あえて問題にされることなく、人びとの思考や行為の前提となっているのである。

さて、日常生活において、ある行為が特定の要因の結果生じる因果関係に支配されているとすれば、人間の行為の意味をあれこれ考える必要はない。ああでもないこうでもないと考えあぐねる思考のプロセスは不要である。そこに法則性を見出しさえすれば、原因の特定によって自動的に結果がついてくる。ところが、現実は、人がさまざまな瞬間に、さまざまの視点から見た、さまざまの現実が重なり合い、せめぎ合いながら、さまざまの主観がとらえた現実がより広い世界を形成している。そして、幾重にも現実が織りなしている世界は、単純な因果関係ではとらえきれない。

人が努力を重ねても、生きている世界の現実を完全に正確に知ることはほとんど不可能といってよいだろう。しかし、そもそも生活の中で真実を知ること、知っていることそのものは必ずしも大きな意味合いを持っていない。むしろどのように考えているかということの占める位置づけの方がはるかに大きい。さらに、日常生活世界における人間の行為や認識は、たとえそれが同一人のものであっても、矛盾していたり、あいまいであったりすることは珍しいことではない。同じ対象に対してであっても、時間を変えれば、異なった捉え方がされるのはよくある話だ。それゆえ、たとえ自らの行為であったとしても、常に「その行為をとった理由はかくかくしかじかである」とはっきりいいきれる人をさがすのは困難だろう。かように主観性は変化する、なかなかとらえがたいものなのだ。しかし、それでも人はものごとを自らの視点で捉えるしかなく、その行為はその対象が主体にとってどのような意味をもつかに左右される。

このように個人の行為すら明確にはとらえがたいものであるのだから、多数の人々が構成する社会の現実は、単純な現象ではないということは明白だ。誰かが自らの行動の理由を断定したとしても、他者から見ると幾通りもの理由が考え出されるかもしれない。善意でしたことが、相手には伝わらないこと、かえって悪意にとられるようなことは日常的に多くの人が経験していることではないだろうか。

先にも述べたように、現実は複雑かつ多層的なのである。そこではいくつもの関係が重なり合い、時には反発し合い、消滅していくものある一方で、新たな関係性が生まれている。そのひとつをとりあげてみれば単純に見えたとしても、それが他の何ものからも影響を受けることなく孤立しているということは稀で、他者や他の事象に影響を受け、あるいは影響を与えている。そしてそのような多彩な関係性、つながりが延々と続いていく。一人の友人との関係や、家族といった小規模の関係から、大規模の組織や社会制度などにまで広がっていく。したがって、一見単純に見える現象であっても、背後に複雑な関係性や文脈が控えているもので、簡単に理解できるかというとそんなわけにはいかない。

科学との関係に話を戻すと、客観的な手法では割り切れない領域が日常生活の世界である。日常生活と日常的経験という生活世界を理解しようとするときに、主観的視点を欠いていれ

ば、そこから導き出される結論や理論は現実から離れた不自然なものとなってしまい、客観性を追究しようとしながらも結果としてそこから遊離したものとなるからである。つまり、生活そのものがそれを理解するためのもっとも基礎的なデータなのである。生活世界の現実は抽象化される以前の一種混沌とした世界である[16]。この生活世界をとらえる方法は、科学が起点とする前提をも含み、科学という行為そのものを包含するものでなければならない。

もちろん、自然科学的方法や理論は、人間が現実世界で経験していることからは導き出されることのない虚構や空想の世界を築き上げようとしているわけではない。逆にどんなときでもどんな場においても有効な理論を構築しようと努力を重ね、現実世界の行為や現象を科学的にいかに正しく、合理的、客観的に説明するかを日々追究しているのである。それでも、日常生活とは別の抽象的な世界においてしか、何らかの行為が検証されないのなら、そのような理論は正しいものとは言えないのは繰り返し述べてきた通りである。では客観性はどのようにして成立するのだろうか。

人は常に自分の視点という制約を受けている。自分というパースペクティブ抜きでは思考することすらできない。現実はそれゆえ主観的であるという制約から逃れえない。社会的な現実もそうである。シュッツの言葉をかりれば、「他者の生きられた経験とは、他者についてのわれわれ自身の生きられた経験によらなければ解釈できないものである」[17]また、人はそこから視力が及ばない外側の世界は見ることができない。ひとりひとり異なる視点と異なる視界をもち、共通して見ているものもあるだろうが、各人が少しずつ異なる現実を目にしている。さらに、個人のもつ複数のパースペクティブは、人が社会生活を送る中で形成される。さまざまな集団に所属し、多数の役割を身につける人は、役割の変化とともにパースペクティブも変える。したがって、ひとつのパースペクティブだけから見てみても物事の一面しか見えない。一つのことを見るのにも多くのパースペクティブがある。

結局、現実世界は主観性によって補完されることがなければ、客観性をもちえない。どんなに客観的であろうとしても、最終的にはその客観性も主観性でしか捉えられない。しかし、それは客観性の限界であると同時に、主観性によって科学がより現実に近づくという意味においてより精度を増すということでもある。明晰さの翳りは必ずしも真実や物事の本質から遠ざかることではない。なによりも科学的合理性は現実に立脚していなければならないのである。科学は客観的な側面だけでなく、主観的な側面ももっている。だからといって現実は二元論で捉えられるようなものではない。社会的現実は、個人レベルで、あるいは組織を通

16) シュッツ（1970　訳書293頁）によれば、「自然科学が対象としている自然の概念は、フッサールが明らかにしているように、生活世界からの理念的抽象であり、そこでは個別的な生を営んでいる個人や実際的な人間の活動から生じるすべての文化的対象は原理的に排除されている。だが、社会科学者が研究しなければならない社会的現実とは、まさにこの自然科学者が抽象しなければならない生活世界のこの層位なのである」

17) Schutz 1970　訳書156頁。

して関係性を結ぶという性質上、人びとは共有する認識をもっており、これは間主観性と呼ばれている概念である。それは主観に対立するものとして存在するのではなく、主観をふまえたうえで生じる共感や、コンセンサスなのである。そこには常識も含まれてくるが、間主観性は常識という言葉のもつ固定的な要素は含意しない。

2．都市を見る視線

2.1 生活主体のパースペクティブ

これまで、現実世界を見るための科学的方法について現象学あるいはシンボリック相互作用論等のパースペクティブを主として援用しながら考えてきた。今度は、それを踏まえて、都市をどのように見るのかについてもう少し踏み込んで考える。

前項で生活世界の現実について述べたが、法や経済、社会制度を取り扱うためにこれまでに多様な手法が提示されてきた。そして、都市についてもさまざまな議論が行われ、数多くの都市の将来像あるいは理想像が描かれてきた。

最近では温暖化やオゾン層の破壊などの地球環境問題が深刻化し、地球環境をはじめ生活環境を守ろうという意識が高まってきた。そのような状況の中で、持続可能性という言葉が注目され、「持続可能な都市」という都市像が多くの都市で目標に掲げられることになった[18]。

確かに環境の問題は軽視できない重要な問題である。しかし、都市の持続可能性と都市における人びとの生活を考えるとき、それは人びとの生活全体の中で占める位置からすると第一の課題にはなりにくい。なぜなら環境問題の逼迫度は、身近な場所で有害物質が検出されたとかいうことでなければ、今日明日のわが身に迫って認識されることではなさそうだからだ。持続可能な都市というのは環境問題の重要性をアピールする言葉である。それが生命に深く関わっているのは事実だ。けれど、今現在の生活で困難を抱えている人にとっては、持続可能性は二次的な問題にならざるをえない。

たとえば、職を失ったとか、虐待を受けているとか、病に臥している人たちは、他の多くの人たちが当たり前に享受している生活を送れたらと切に願っているのではないか。多くの人たちには当たり前すぎてそれが幸福であることにすら気づかないような生活を祈願しているのではないか。社会的、心理的な苦痛やそれに伴う恐れは平穏な日常においては特別なことであるから、苦痛が日常化することは異常な事態である。そうした苦悩を個人が抱えることは、人々が共有できる問題が与えるそれよりも一人の人間にとってはるかに重荷に感じら

18) 1992年のリオ・デ・ジャネイロで開催された地球サミット以降、世界中の都市がサステイナブル・シティ（持続可能な都市）を目指すべき都市像に掲げるようになった。それに先立つ1990年にＥＣ委員会ではサステイナブル・シティ戦略が最重要課題としてとりあげられている。

れるものである。たとえ今平穏に暮している場合であっても、事故や災害の不安はゼロではないだろう。危機に直面しないと日常生活のありがたさは見えにくい。しかし、日常性にこそリアリティがある。そして、日常生活という基盤があってこそ、よりよい生活、よりよい環境が見えてくるのだ。したがって、市民が望むのがまずは安心して日常の生活を送ることであるのは否定できない。

都市の持続性を追求する中にも、もちろん人間が豊かな生活を送るというような意味合いも含まれているだろう。けれど、都市や地球の持続性は人びとの生活あってのものである。したがって、持続可能性そのものは都市の第一の目的にはなりにくい。よりよい生活を求めると同時に持続的な生活を求める、あるいは結果として都市が持続することを求める、つまり、よい環境はよき生活のための条件である。その結果として都市も生かされるということだ。持続可能な都市という都市像は複数の選択の中のひとつである。

あるいはまた、コンパクトシティといった都市像も考えられているが、都市の形態が都市の快適さを決定するわけではない[19]。その内容がたとえ大きさという概念に縛られるものではなくとも、その名称が制限的に作用することは避けがたく、またグローバルな広がりを無視できない現代の特徴を含意しにくい。都市計画史上インパクトの大きかったハワードの「田園都市」やル・コルビュジェの「輝く都市」などのように空間的都市環境からの発想、そしてこれまでの施設や建築物中心の都市計画は、人よりも環境中心の思想に基づいている。つまり、環境による決定論的な思想に基づいていると考えられる。

さらには、日本の自治体においてしばしば用いられている「ひとにやさしいまちづくり」という一見人間的な側面に力点を置いたように思われる表現も、主体が省略されていることで、人がまちをつくるという意識があまり感じられない。実際に、ユニバーサル・デザインのような主としてハード面での都市の基盤整備よりも広義の使われ方が、広く行われているわけではない。福祉的なコンテクストで使用される概念となってしまっている。しかし、優しさというのは、本来そのような形で限定されるものではないはずである。

要するに、そういった都市像は一定の方向性を示すものとしては有効である。しかし、多層な現実に基づいた都市の姿を追求していくためには、言葉に伴うイメージや限定的要素により、現実の一面を示すに留め、別の要素を隠してしまうということを忘れてはならない。

都市をめぐる議論の中で、都市や人の個性や創造性が主張されながらも、因果関係を基礎とする思考がまだまだ優勢である。しかし、人は社会や過去の産物ではない。社会的行為の原因が特定されたから答えが出るものではない。原因が同じであってもそこから必ずしも同じ結果が導かれるとは限らない[20]。人間の行為は環境によって決定されるものではない。ま

19) コンパクト・シティは持続可能な都市の形態として1990年代以降ＥＵで推進されるようになった都市像。
20) 人の意識をとりあげるとき、たまたま生じた結果がある原因によるものと特定されるとしても、可能性のひとつでしかない。

た、そうあってはならない。なぜならそういう人生には希望がないからだ。人が生まれる前から存在した社会的、文化的なシステムが人びとの行為に大きな影響力をもっているのは確かであるが、人間には自らの自主性、主体性も存在する。それゆえ、社会的行為は、因果関係だけではなくそれがどのように形成されるかという見地からも研究されねばならない。すなわち、意識形成のプロセスや関係性を研究しなければならないということである。

人びとの意識を重視するのが本論における都市を見る視線である。これは人間の生活からのパースペクティブである。人間を理解するため相互作用（コミュニケーション過程）に焦点を当てる[21]。人間は環境に受動的に反応するのみならず、環境を自ら定義し、他者とも関わっていく。人間は受動的な存在というよりは動的主体であり、社会も動的な関係性やプロセスにより構成される[22]。それゆえこのような相互作用過程を取り込んだ普遍的な科学や研究が必要であり、それを考慮したうえでの政策でなくては現実から遊離してしまう。現実の問題を前にして社会や人間の行為の意味を照らし出すために、主観性、間主観性からのパースペクティブは客観的かつ実践的な手法よりも適切な場合もありうる[23]。それが抽象化に至る前のありのままの現実を解釈するということのもつ意味である[24]。

都市政策は客観的手法を公平性の説明のために用いてきた。統計をとり、意識調査を行って、政策の裏づけとしてきた。都市政策の理念が掲げられることがあっても、それは万人が受け入れられるようなレベルの抽象化でとどまり、具体性は数値で提示することとされがちである。そこではありのままの現実をとらえようとする志向は必ずしも強くない。そういった手法はある程度有効性を期待できる。しかし、いったんその手法が有効であるという判断のもとに、ある視線が基準となってしまうと、その基準からはずれたものは抜け落ちてしまい、場合によっては排除しようとする意識が働く。それは個人の思考にも組織の意思としても作用する力である。こうして、固定化された視線や手法は、人びとの自由な意識の働きを妨げるならば、それ自体が欠陥の原因となってしまう[25]。事業の継続性から生じる時間の硬直性が柔軟性の欠如を生み、政策との分離をもたらすこともある。

また、生活の質であるとか、公平性という概念は客観的に捉えようとしても各人の基準にずれがあり、主観的、相対的なものであることは避けられない。もちろん都市の中の現実の

21）相互作用は主体と他者との間だけでなく、自己自身との相互作用も含む。

22）そのプロセスは固定化できず、移ろいやすい。それを数値化したり、言語化することは、プロセスという現実を固定化し、まさにそのことによりプロセスから切り離されたものとなる。このことはプロセスの固定化・安定化が求められる場合においても潜在的なリスクとして踏まえておかなければならない。

23）主観性は人間の個人的属性等による主体的な側面、間主観性は他者との関係性から生じる側面である。相互作用のプロセスにはどちらも含まれる。

24）「ありのままの現実」とは、合理的に考えられ、系統だって説明される以前の、純粋ではなく、非合理や不条理や矛盾が交錯している状態。

25）都市政策に公式はない。とはいえ、各地で大同小異の政策がとられるという現実は、何かはじめようというときに、常に「よそではどうなんだ？」ということを意識せずにはいられないことを示唆している。

多様な問題に接してそれにどう対処すれば改善されるのかという現実を踏まえたところからはじまることが多いのは事実である。しかし、政策が予算化される過程で不可欠とされるさまざまな統計は、公平性を効率性にすりかえてしまうのではないか。つまり、いったん予算化されると、今度は効率性が求められる。その施策の有効性は費用対効果によって示される。施設の利用者数や利用金額、補助金額などといった数値が一人歩きをはじめる。一都市の独自の制度にとどまらず、国家レベルの制度として確立されると、現実はますます遠くに見え隠れするようになってしまうのだ。そうして、公平性の中味が経済的効率性に姿を変え、人間の生活との乖離、生活実感との温度差が大きくなっていくのである。
都市政策が基盤とすべきなのは、公平性や効率性の前提となる部分で、それは生活あるいは人生において間主観的な部分である。

都市や社会という場には、経済性を追求する人もいれば、芸術性を求める人もいる。いろいろな人がいて、いろいろな側面を持っている。社会のもうひとつの特性は、人が生活を送るためには他者と関係をもたざるをえないということだ。さまざまな人びとに囲まれて、人と人との間の関係性をどのように調整していくかが課題である。

生活本位というところから、多元性と実践性が求められる。生活本位の政策と、その基盤としての総合的知識が必要である。そのために、分断され、分散した知識を統合しなければならないのである。

2.2 専門性の開放と知識の拡大に向けて

生活を基盤とする政策のために知識の統合の必要性を説いたところであるが、私たちが生きている世界においては、情報が溢れているというのに必要な情報がすぐに入手できるわけでもないし、現実を理解するのはやはり難しい。それらの情報には一貫性がない一方で、情報は専門分化されてもいる。このような状況が現代社会の抱える性質となっている。ここから専門性の枠にとどまらない知識の開放の必要性が見えてくる。

専門用語は専門世界の内部では解説が不要の共有された言語で、わかりやすさをもっている。その反面、外部者の排除の意味合いももつ。つまり、言語による情報アクセスの制限である[26]。知識が錯綜しているにもかかわらず、それらが偏在し、生活世界についての統合し

26) シュッツ（1964　訳書47頁）はこのような状況を次のように捉えている。「現代社会における人間生活の際立った特質は、ある人の生活世界全体がその仲間達に十分理解できないばかりか、自分自身にも十分理解できないと本人が確信しているという点である。実用的な経験、科学、科学技術などによって確証された知見から作られた知識の貯えstock of knowledgeは、理論上はあらゆる人に入手可能である。ところが、この種の知識の貯えは統合されたものではない。知識の体系はそれ自体首尾一貫していないばかりか、互いにいくらか矛盾しながら、全体としてある程度のまとまりをもって並存しているだけという構成になっているに過ぎない。逆に言えば、特殊専門化された体系を研究する人がとる態度はそれぞれの体系ごとに異なっており、それらの間に横たわる越え難い溝そのものが、特殊専門化した研究を成し遂げる条件とさえなっているのである」

た理解の得られない現代、専門化が進んだこの時代は、専門家の役割に変化を求める。アンソニー・ギデンズは市民が情報に接近可能になったというプラスの側面から状況を捉えて、意思決定を「専門家」任せにせず、政治家や市民が参画すべきとしながら、科学技術とその専門家の役割を次のように位置づける。

「科学技術は、民主的な政治過程の圏外にとどまり続けることが許されなくなったのである。専門家だからといって、私たちにとって何がよいことなのかを知っているわけではないし、疑問の余地のない真実を、いつも専門家が示してくれるわけでもない。専門家の役割は、彼らが導く結論と政策提言の根拠を、わかりやすく市民に示すことに尽きるのである」[27]

専門家といえども、完全ではないし、生活世界の現実を前に途方にくれることもある。たとえ知識が深まるという形で知識の量が増加しても、それによって全体像を捉えることがますます難しくなることもある。そこで、ギデンズが指摘するように、専門家は自らの知識を市民に示すこと、それもわかりやすく示すことが必要である。専門性という領域の中でのみ通用する専門用語という言語にかわる、普遍的で誰もが関与できるアプローチが必要なのである。それは単なるわかりやすさとは異なる、生活実践、行為と結びつく言葉である。それは次のようなプロセスを経て人びとに働きかける言葉である。

ものごとの「意味」は人びとの相互作用の過程で生じる。対話の場合、話者は何らかの意味を聞き手に伝えようとする。聞き手はそれを解釈しようとする。言語認識は重なる場合もあるが、大なり小なりずれがある。認識に大きな隔たりがある場合には葛藤が生じる。一定の共通点を見出せれば、対話者は共同で何らかの行為を行うこともできるし、次のステップに進むことができる[28]。その際の意味や意思の伝達、解釈は通常言語を通して行われる。言語の多くは既成のシステムであり、人びとは学習過程を経て使用法を習得する。それゆえに言語は社会的な意味を伴っている。したがって、コミュニケーションは社会的な意味を伝え、解釈するプロセスであり、「意味」は社会的に規定されているのと同時にそのコミュニケーションの過程において話者と聞き手がつくりあげていくものである。そうして、その独自の文脈における意味が形成される。

結果としての表現は形になるが、そのプロセスそのものは明確に表現できない[29]。記号化しても意味がないのである[30]。それは共通の理解を生み出そうとする過程そのものとは別の

27) Anthony Giddens, 1998 訳書106頁。

28) たとえば、話者が「お腹が空いた」という言葉を発したとき、「何にもないわよ」、「買い物に行ってきて」、「昼食にしましょう」など無数の答えがあるが、それは話者の意図と同じこともあれば違うこともあり、話者の意図した答えを得られなければ意図した行為にたどりつけない。

29) 話者Aと聞き手Bの関係性というものを何らかの形で表現するとして、仮に⇔という記号でA⇔Bと表わすことは可能である。しかし、その記号でその具体的な内容を解説することはできない。言葉に置き換えた瞬間にそれは固定化される。

30) ベルクソン（1889 訳書157頁）は、「感覚も好みも、私がそれらを孤立化し、名付けるや否や、私には物として現れるようになる」から、同一の感覚や好みは存在しないと述べ、それを「人間の心の中にはほとんど進行しかない」

ものだからだ。

普遍性は個々人の経験から遊離し、一部の特別な人びとにとってのみ接近可能な「客観的」「科学的」な方法によって得られる普遍性ではなく、また、個人にしかわからない主観でもない。他者の目で自己の思考プロセスを吟味するとともに、その逆も行うことで、様々の人びとに接近可能な普遍的な経験の世界である。生活世界における人びとの行為や社会を研究の対象とするにあたっては、主体の知っていることを知り、見ているものを見、理解していることを理解することが必要である。他者の言葉、パースペクティブを理解し、主体にとっての現実を組み立てなければならない。それを抜きにして、出来事は理解できない。そして、閉じた世界における職業的専門用語で語るのではなく、開かれた生活世界におけるコミュニケーションのプロセスの重要性を認識しなければならない。専門性という呪縛からの解放とその生活世界への開放、それが生活世界という実践的な世界に生きるための知識統合の条件である。

むすび

これまで述べてきたように、生活世界は主観性、間主観性という概念を抜きにして理解できない。したがって、都市政策に求められるのは、生活を基盤にした人びとの間に共通する関心や利益への意識を開くことである。それゆえに、他者との関係性の中での意識の相互作用や間主観性という概念が重要なのである。さらに、専門性という呪縛からの開放による知識の開放が知識の統合と拡大につながるということを示した。この人々の意識形成プロセスから、生活世界の現実をベースとし、あらゆる知識を統合して都市を見るパースペクティブは固定的なものではなく、常に変化しているものである。そして、間主観性は普遍的でありながら固定されていない概念であるゆえに都市を解析するキーワードとなりうるのである。

因果関係や二元論でとらえられない多元的な社会である都市への学際性、総合性、実践性に基づく都市政策へのアプローチは、これまでの当然として考慮されることもなかった目に見えない束縛を明らかにするものと考えられる。

これらの理論的基礎をふまえて、具体的な都市の姿を検討する中で、都市における理論と政策を結ぶことが次の課題である。

からだと説明している。記号や言葉によって分類することは進行中の行為の性質を変えてしまうのである。たとえば、固定化された場合、他の可能性の選択の余地がなくなってしまう。

参 考 文 献

Bachelard, Gaston. (1934) *Le Nouvel Esprit Scientifique* 関根克彦訳（2002）『新しい科学的精神』 筑摩書房

Bergson, Henri. (1889) *Essai sur les Donée Immédiates de la Conscience* 中村文郎訳（2001）『時間と自由』岩波書店

Charon, Joel M. (2001) *Symbolic Interactionism An Introduction, an Interpretation, an Integration 7th Ed.* Prentice Hall

Giddens, Anthony (1998) *The Third Way* Polity Press佐和隆光訳（1999）『第三の道』日本経済新聞社

Howard, Ebenezer. (1965) *Garden Cities of Tomorrow* Town and Country Planning Association長素連訳（1968）『明日の田園都市』鹿島出版会

Husserl, Edmund. *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendentale Phänomenologie* 細谷恒夫、木田元訳(1995)『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』中央公論新社

Jacobs, Jane (1961) *The Death and Life of Great American Cities* Random House Inc. 黒川紀章訳（1977）『アメリカ大都市の死と生』鹿島出版会

Le Corbusier, (1947) *Manière de Penser l'Urbanisme*, L'architecture d'Aujourd'hui 坂倉準三訳（1968）『輝く都市』鹿島出版会

Relph, Edward (1976) *Place and Placelessness* Pion 高野岳彦、阿部隆、石山美也子訳(1999)『場所の現象学』筑摩書房

Schutz, Alfred. (1970) *On Phenomenology and Social Relations* (*Edited by Helmut R. Wagner*) The University of Chicago Press. 森川眞規雄、浜日出男訳(1980)『現象学的社会学』紀伊國屋書店

――――― (1964)*Collected Papers II, Studies in Social Theory, edited and introduced by Arvid Brodersen*, Martinus Nijhoff 桜井厚司訳(1997)『現象学的社会学の応用』お茶の水書房

Tuan, Yi-Fu. (1977) *Space and Place* University of Minnesota山本浩訳（1993）『空間の経験』筑摩書房

若林幹夫（1999）『都市のアレゴリー』inax出版

Weber, Max. 世良晃志郎訳（1965）『都市の類型学』創文社